久留米大学文学部紀要
国際文化学科編第21号（2004）

奄美大島北部・南部の2型音調方言

崎　村　弘　文

On the 2 Tone-Type Dialects in the North and South Parts of Amami-Ōshima

Hirofumi SAKIMURA

【要旨】（3．まとめを参照）

【キーワード】2型音調方言，奄美大島，根瀬部（ネゼブ），屋鈍（ヤドン）

0．はじめに

0－1　奄美大島方言の音調体系についてのまとまった報告は、従来、平山輝男ほか1966が知られていた程度であったが、最近、上野善道1996a・同b・同c・同d・1997・2000等が出て新たな観点からの解釈が試みられるようになって来た。しかし、その解釈は、従来の研究が積み上げて来た、最小弁別対 minimal pairs やいわゆる金田一の類との対応関係等を確認するといった基本的手順にあまり重点を置かず、地元では非常に音韻変化の激しい方言として知られているものにつき、〈tonogenesis〉的観点から全く新たな語類・式の対立等を認めて行こうとするもののようである。筆者のような凡夫には、その目指すところがいま一つ明らかでない。

そうした変化の激しい方言について考察する前に、まず他方言等との対応関係を楽にたどり得る方言について考察してみても良いのではないか。本稿は、そうした観点から筆者なりにまとめてみたものである。いずれも、調査は20年ほど前に行なったものであり、その後の筆者の住地変更等に取りまぎれ、話者名簿を紛失するなどしているが、結果自体の信頼性は十分なものと信ずる。南部方言は、独自に発達したCVC構造との関係で狭義の音韻体系については変化が激しいとも云えるが、それにかぶさる音調の体系はそれに照らせば存外簡素なもののようである。北部方言・南部方言とも2型の語声調方言と見なし得る点は、奄美大島諸方言全体の音調体系の在り方を考える上で重要であろう。

諸賢の御批正を賜われば幸いである。

1．奄美大島北部方言

1－1　鹿児島県名瀬市根瀬部（ネゼブ）方言（2型音調）。

調査には、根瀬部在住で、1986年7月段階で70歳代の男性話者2名・女性話者1名の協力を得た。

1－2　根瀬部方言の体言の音調

根瀬部方言はモーラを韻律単位とする2型音調の方言と認められる。以下に具体的様相を示す。

◐～◐▷（●▷）

子［kʔwa▼］	
血［tʃʔi▼］	1
名［na▼］	
葉［ha▼］	2
木［kï▼］	
手［tï▼］	
目［mï▼］	
湯［ju▼］	3
川［ko▼］	2
馬［mʔa▼］	3
前［më▼］	5
歯［ha▼］	
夜［ju▼］	
身［du▼］	
兄［mï▼］	
姉［ʒë▼］	
おまえ［ʔja▼］	

●○～●○▷

飴［ʔamï］	
牛［ʔuʃi］	
風［kaʒe］	
釘［kʔugi］	
口［kut̥ʃï］	
首［kʔubï］	
腰［kuʃï］	
酒［ʃehë］	
底［suku］	
袖［sudï］	
竹［dë:］	
爪［tʃïmï］	
鳥［turi］	
蠅［Fëi］	
箱［haku］	
蜂［hatʃï］	
鼻［hana］	
髯［çigï］	
紐［çimo］	
臍［Fuʃu］	
星［Fuʃi］	
水［muʒi］	
道［mitʃi］	
虫［muʃi］	
桃［mɯmɯ］	
嫁［jumï］	1
石［ʔiʂi］	
歌［ʔuta］	
音［ʔutu］	
紙［kabi］	
旅［tabi］	
夏［natsï］	
旗［hata］	
肘［çiʒi］	
冬［Fuju］	
胸［munï］	
村［mura］	2
網［ʔami］	
犬［ʔiN］	
色［ʔiro］	
腕₁［ʔudï］	
親［ʔuja］	
顔［tʃïra］	
神［kami］	
草［kut̥sa］	
靴［kut̥ʃu］	
雲［kʔumo］	
米［kïmï］	
島［ʃima］	
月［tʂïkï］	
網［tʂïna］	
時［tʔokki］	
年［tuʃi］	
波［nami］	
墓［haka］	
花［hana］	
豆［mamï］	
耳［miN］	
物［muN］	
山［jama］	
指［ʔibï］	
夢［ʔïmï］	
綿［wata］	3
跡［ʔato］	
側［ʂuba］	4
汗［ʔaʂë］	
鶴［tʂïru］	5
戸［jado］	
おじ［wuʒi］	
斧［wuN］	
おば［wuba］	
塩［masu］	
妻［tuʒi］	
腹［wata］	
夫［wutu］	␤
相撲［ʂumo］	形
明日［ʔasa］	
かんな［kana］	
昨日［kʔino▼］	
俵［to▼ra］	頭
涙［nada］	命
あなた［naN］	
着物［kʔiN］	
わたし［waN］	
あなたたち［nakja］	
わたしたち［wakja］	

●●～●●▶

右₁ [migi] 1
池 [ʔike]
瓶 [kamï]
櫛₁ [kuʃi] 3
息 [ʔiki]
板 [ʔiʃa]
糸 [ʔito]
臼 [ʔusï]
海 [ʔumi]
帯 [ʔubi]
数 [kazï]
肩 [kata]
汗 [ʃiru]
隅 [ʃiN]
種 [tanï]
中 [naha]
箸₁ [hasï]
針 [hari]
舟 [Funï] 4
秋 [ʔaki]
雨 [ʔamï]
影 [kagï]
声 [kui]
鍋 [nabï]
春 [haru]
眉 [majo] 5
脚 [hagi]
鍬 [to▾gï]
ごみ [gumi]
舌 [ʃiba]
煤₁ [sïsï]
祖父 [Fuʃu]
土 [miʃa]
泥 [doro]
咽 [nudï]
紐（細）[jiro]
孫 [mʔaga]
踵 [ʔado]
砂糖 [ʂata]
裸 [hada]
兄姉 [ʃiʒa]
太陽 [tïda]
おまえたち [ʔjakja]

●○○～●○○▷

踊り [wuduri]
形 [kataʈʂï]
鎖 [kʔusari]
煙 [kïbuʃi]
涎れ [judari] 形
女 [wunagu] 小豆
男 [juNga]
鏡 [kagaN]
助け [tasïkï]
頼み [tammi]
鋏 [hasaN] 頭
枕 [makʔura] 命
畑 [hatë:] 兜
腕₂ [kïina]
杖 [gusaN]
箸₂ [tïmutu]
夜₂ [juru:]
頭 [kamatʃï]
子供 [warabï]
姉妹 [wunari]
鼠 [nïzïN]
牝牛₁ [ʔonaN]
兄弟 [jë:ri]
このあいだ [konë▾da]
※鏡・鋏・畑・杖・夜₂・姉妹・鼠・牝牛₁は，しばしば第２モーラ高の調値に変異する．

●●●～●●●▶
●◎●～●◎◎▶#

印 [ʃiruʃi] #
初め [haʒimï] # 形
言葉₁ [kutuba] #
白髪 [sïragï]
流れ [nagarï] 頭
油 [ʔabura] #
命 [ʔinutʃi] #
箒 [hokki] 命
裸足 [hadasï]
左 [çiʒari] #
蚯蚓 [mïmïʒa] # 兎
鯨 [kʔuʒïra] #
薬 [kuʂuri]
椿 [tsubaki] # 兜
垢 [Fïguru]
顎 [ʔutïgï]
井戸 [ʔigawa] #
尻 [bukka]
祖母₁ [homma]（古）
祖母₂ [hannï]
肉₁ [masïsï]
肉₂（赤身の） [ha : mi]
肉₃（白身の） [ʃirumi] #
虹 [no : gi]
庭 [jammë]
母 [ʔamma▾]
膝 [tʃïbuʃï] #
松 [matʃïgï]
右 [nigiri] #
婿 [mu:kʔwa]
欠伸 [ʔakubi] #
いとこ [ʔitoko]
蛙 [bikkja]
蔓 [kazïra]
烏 [garasï] #
言葉₂ [jumïta]
背中 [naganï] #
煙草 [tabaku] #
額（ヒタイ） [mïttʃu]
弟妹 [ʔututu] #
腫物 [nïbutu] #
引き臼 [çikjusï]
褌₁ [ma:ʃi] #
人指し指 [tʃʔusaʃi] #

●○○○～●○○○▷
甥［wuikk'wa］
姪［mïikk'wa］
手のひら［tïNwata］
老人［tuʃikjata］
※傍線を付した語は，むしろそれによって示される調値を取る方が普通．

●●●●～●●●●▶
●◎◎●～●◎◎◎▶ #
岩［Fu：ʔiʃï］
櫛₂［sabakki］
牝牛₁［kutïʔuʃi］ #
牝牛₂［wu：ʔuʃi］
大人［ʔuFuttʃ'u］
光［çikkjari］
牝牛₂［mï：ʔuʃi］
突き臼［tsïkïʔusï］

天井［tïNʒo：］
中指［na:ʔibï］
褌₂［sïtaʔubi］
若者［nïseNkja］

●○○○○～●○○○○▷
腿［momotabura］
雀［jumuNduri］
息子［jiNganuk'wa］
娘［wunagunuk'wa］
※雀は第2モーラ高の調値を取ることも有る．他は傍線によって示される調値を取る方が普通．

●●●●●～●●●●●▶
乙女［nïsemïᵛrabï］
小指［k'wakk'waʔibï］
鍋墨［nabïFïgoro］

如上の調値は、次のような調類にまとめられる。

	1モーラ語	2モーラ語	3モーラ語	4モーラ語
a類	◐～◐▷ ●▷	●○～●○▷	●○○～●○○▷	●○○○～●○○○▷
b類	—	●●～●●▶	●●●～●●●▶ ●◎●～●◎◎▶	●●●●～●●●●▶ ●◎◎●～●◎◎◎▶

5モーラ語
●○○○○～●○○○○▷
●●●●●～●●●●●▶

調類～調値の関係規定は、
a類：語句の第１モーラを高にせよ。
b類：語句の全モーラを高にせよ。
※１モーラ語の調値は、a類相当のものしか認められず１型化している。
また、b類の３モーラ語・４モーラ語に関して、語句の中ほどがやや下がり気味になる調値が認められるが、これは、或るいはa類との区別が曖昧化しつつあることを示すものかとも思われる。
さらに、a類に所属すると見られる語彙のうちに第２モーラ高の調値を取るものがいくつか認められるが、その多くはそれに後接するモーラが撥音・促音・長音等この方言で発音の弱化しやすい音素から成るものであり、該調値は後接第３モーラの十分な発音を助けるべく発生した音調変化によるものと見られる。「腿」「息子」「娘」を示す語の調値については、なお検討すべき余地が有るが、概ね語句全体の発音を安定的なものならしめるために生じた音調変化の結果として上記と同様に考えておいて良いものと思われる。

１－３　根瀬部方言の用言の音調
イ）動詞
動詞の語形変化を「着る」（１類）相当語と「見る」（２類）相当語について、大まかに現在終止形・過去終止形・中止形・体言接続形・用言接続形・命令形・否定形に分けて見てみると、次のようになる。
◦着る：着る。kirï または kiruN、着た。kiʃa(N)、着て kiʃi、着る～kiruN、着たい kiritʃasa、着ろ kirï、着ない kiraN
◦見る：見る。mirï または mjuN、見た。miʃa、見て miʃi、見る～mjuN、見たい mitʃasa、見ろ mirï、見ない mjaN
調値はいずれも高平調で、名詞b類のそれに同じであり、１型化しているようである。
他に、１類相当で「浴びる」ʔamïrï・「入れる」ʔirïrï・「為る」ṣïrï・「死ぬ」ʃinï・「居る」wuri 等、また、２類相当で「起きる」Furï・「蹴る」kïrï・「受ける」ʔukïrï・「来る」kïrï・「有る」ʔari 等、いずれもそのようである。興味深いのは、現在終止形の１つと命令形とが同形であるものについては、単独の発話でその意味を区別するすべは無く、意味の区別は専ら文脈に依っているらしいことである。音調変化の進んだ果ての姿の１つであろう。
ロ）形容詞
形容詞の語形変化を「重い」（１類）相当語と「長い」（２類）相当語について、大まかに現在終止形・過去終止形・中止形・体言接続形・用言接続形・否定形に分けて見てみると、次のようになる。
◦重い：重い。ʔubusa、重かった。ʔubusata、重くてʔubusatï、重い～ʔubusaN、重かろうʔubusaro:、重くない ʔubusaneN
◦長い：長い。nagasa、長かった。nagasata、長くてnagasatï、長い～nagasaN、長かろうnagasaro:、長くない nagasaneN
調値は、傍線で示した通りである。若干の違いは有るが、いずれも名詞b類について見

られるものと同一であり、ここでも１型化が見られると認めて良さそうである。

他に、１類相当で「遠い」tu：sa 等、２類相当で「良い」jitʃa・「近い」tʃikjasa 等、いずれもそのようである。

２．奄美大島南部方言

２－１　鹿児島県大島郡宇検村屋鈍方言（２型音調）。

調査には、屋鈍在住で、1983年11月段階で70歳代の男性話者１名・女性話者３名の協力を得た。

２－２　屋鈍方言の体言の音調

屋鈍方言はモーラを韻律単位とする２型音調の方言と認められる。しかし、以下に示す如く、その具体的様相は多くの独立性の乏しいモーラの存在によって聊か複雑である。

●～●▶
子［kʔwa▾］
血［tʃʔi▾］　1
名［na▾］
葉［Fa▾］　2
垢［ʔa▾］　3
歯［Fa▾］
身［du▾］

◐～◐▷
木［kï▾］
手［tï▾］
目［mï▾］
湯［ju▾］　3
川［ko▾］　2
舌［ʃa▾］　3
夜［ju▾］
兄［mï▾］

○●～○●▶
飴［ʔame］
風［kadë］
袖［sudï］
竹［dë:］
爪［tʔïmï］
鼻［hana］
髯［çigi］
紐［çimo］
臍［buşu▾］
桃［mumu］
嫁［jumï］　1
歌［ʔuta］
旗［hata▾］
肘［çiʒi］
冬［Fuju］
胸［munï］
村［mura］　2
おじ［wuʒi］
おば［wuba］
父［ʔaʒa▾］
土［mitʃa］
泥₁［duru］
泥₂［muta］
夜［juru▾］
夫［wutu▾］　形
相撲［ʃima▾］
明日［ʔatʃa▾］
昨日［kʔinju▾］　頭
砂糖［sïta］
太陽［tïda▾］

○●～○●▷
音［ʔutu▾］　2
池［ʔike］
色［ʔiru］
馬［ʔuma］
親［ʔuja］
顔［tʔïra］
瓶［kamï］
草［kusa］
雲［kʔumo］
米［kumï］
島［ʃima］
綱［tʔïna］
花［hana］
豆［mamï］
山［jama］
夢［ʔwïmï］
綿［wata］　3
跡［ʔato］
板［ʔitʃa］
数［kazu］
肩［kata］
隅₁［kado］
側［suba］
種［tane］
舟［Funï］　4
汗［ʔasï］
雨［ʔamï］
影［kagï］
鶴［tsuru］

鍋 [nabï]
婿 [muho]
腿 [mωmω] 5
塩 [maʃu]
腹 [wata]
鉋 [kana] 頭
涙 [nada] 命
裸 [hada] 兎
畑 [hatë▾] 兜
おまえ [ʔura]
踵 [ʔado]

●○～●○▷
蟻 [ʔaN]
牛 [ʔuʃ]
釘 [kuk]
口 [kutʃ]
首 [kup]
酒 [së:]
鳥 [tur]
蠅 [Fëi]
箱 [Fakk]
蜂 [Fatʃ]
星 [Fuʃ]
右 [mik]
水 [mïit]
道 [mitʃ]
虫 [muʃ] 1
石 [ʔiʃ]
紙 [kap]
旅 [tap]
夏 [nat] 2
網 [ʔaN]
犬 [ʔiN]
神 [kaN]
靴 [ku▾t]
時 [tuk]
年 [tuʃ]
波 [naN]
耳 [miN]

物 [muN] 3
息 [ʔik]
臼 [ʔus]
海 [ʔum]
帯 [kʔju▾p]
汁 [ʃir]
隅₂ [suN]
箸 [Faʃ]
針 [Far] 4
秋 [ʔak]
声 [kui]
春₁ [har]
前 [mëi] 5
脚 [hak]
妻 [tuʒ]
虹 [no▾k]
着物 [kʔiN]
箒 [hok] 命
わたし [waN]
あなたたち [na▾kja]
わたしたち [wa▾kja]

○●●～○●●▶
孫 [maga:]
助け [kaʃe:]
このあいだ [kuneda]

○●○～○●○▷
踊り [wadu▾r]
形₁ [kata▾tʃ]
形₂ [kata:]
鎖 [kusar]
煙 [kïbu▾ʃ]
印 [ʃiruʃ]
涎れ [juda▾r] 形
女 [wunak] 小豆
鏡 [kagam]
言葉 [kutu▾ba]
白髪 [ʃira▾gï]
流れ [naga▾rï]

鋏 [hasam]
光 [çikjar] 頭
命 [ʔinutʃ]
いとこ [ʔitoko] 命
鼠₁ [nïdïm]
裸足 [hadaʃ]
左 [çidar]
蚯蚓 [mïmït] 兎
薬 [kusur]
椿₁ [tsubak] 兜
底 [suku:] 1
顎 [ʔutu▾gë]
櫛 [sabakï]
杖 [guʃaN]
肉 [maʃiʃ]
咽 [nudui]
墓 [haka▾ʃo]
膝 [tʔïbuʃ]
眉 [mïma▾ju]
欠伸 [ʔakup]
頭₁ [kamatʃ]
頭₂ [tʔïbur]
烏 [gara▾su]
子供 [warabï]
姉妹 [wunari]
煙草 [taba▾k]
椿₂ [kata▾ʃ]
弟妹 [ʔutu▾tu]
腫物 [nïbu▾tu]
褌₁（六尺～） [mawaʃ]
おまえたち [ʔura▾kja]

●○○～●○○▷
俵 [to:ra] 頭
油 [ʔabbura]
枕 [makkura] 命
鯨 [kʔuʒira] 兜
葉₂ [kïNFa▾]
垢₂ [Fuguru]
糸 [nuiso]

腕［kïinja］
瓶₂（水～）［haNdo］
鍬［to:gë］
祖父［ʔuʃʃo］
月［tʲïkkjo］
庭［jammë］
母［ʔamma▾］
松［madïgï］
あなた［nammja］
男［jiNga］
こむら［kubu͡ra］
兄弟［jë:ri］

○●●●～○●●●▶
牡牛［wu:ʔuʃ］
初め［haʒimïtï］

○●○○～○●○○▷
姉［ʔakoggwa］
池₂［tamïkkï］
甥［wuikkʲwa］
斧［nata͡wuN］
脛（スネ）［kara͡▾sïnï］
春₂［ʔurïdïN］

姪［mïikkʲwa］
額（ヒタイ）［majo͡▾gata］
親指［ʔujaʔjïbï］

●○○○～●○○○▷
岩［ʔu:ʔiʃ］
腰［marbunï］
祖母［haNnjë:］
中（家の～）［jaNna:］
蔓［kaddïra］
子指［tï▾ïbïkkʲwa］
頼み［tammari］
牝牛［mï:ʔuʃ］
手のひら［tïNwata］
天井［tïNʒo:］
中指［na:ʔjïbï］
人指し指［tʃʲu:sa▾ʃi̥］

○●○○○～○●○○○▷
雀［jumuNduri］
娘［wunaknukʲwa▾］
薬指［kusuri͡ʔjïbï］

●○○○○～●○○○○▷
尻［mattabura］
大人［ʔuttʃuNkja］
背中［kuʃnaganï］
鼠₂［ʔo:ʒoggwa］
息子［jiNganukʲwa▾］
褌₂（越中～）［tʲïru͡mawaʃ］

●○○○○○～●○○○○○▷
若者［wa▾saNtʃʲuNkja］

如上の調値は、次のような調類にまとめられる。

	1モーラ語	2モーラ語	3モーラ語	4モーラ語
a類	●～●▶	○●～○●▶	○●●～○●●▶	○●●●～○●●●▶
b類	◐～◐▷	○●～○●▷	○●○～○●○▷	○●○○～○●○○▷

調類～調値の関係規定は、

a類：語句の第2モーラ以後を高にせよ。語に第2モーラが無ければ、語句の第1モーラ以後を高にせよ。

b類：語句の第2モーラを高にせよ。語に第2モーラが無ければ、語句の第1モーラを降にせよ。

※このほかに2モーラ以上の語句に●○……の調値を持つものが多数認められるが、それらは平山輝男ら1966でも既に指摘されていた通り、第2モーラが母音の弱化・脱落によって独立性の乏しい子音のみのモーラとなった結果生じた、条件異調値を取ると云うべき

ものである。●○では全48語中、第２モーラがそのようでないものは「あなたたち」「わたしたち」の２語であるが、その両者とも第１モーラの後に短いが単独の母音（引き母音。単独の母音もこの方言では独立性の乏しい要素となりがちである）が認められ、やはり条件異調値を取る例と見なされる。●○○では全19語中14語が明らかに条件異調値の例。残り５語のうち「油」「枕」は第１モーラの後に短い単独の子音（促音）をかかえており、やはり条件異調値を取る例と見なされる。「鯨」は第２モーラの母音が短く、単独子音の例に準じて考えて良いものと思われる。「垢₂」「松」も第２モーラの母音は狭母音で、脱落が起きやすい条件を備えたものであり、或るいは聞きように依っては母音は短いと把えられるか。●○○○では全12語中11語が明らかに条件異調値の例。残り１語の「子指」は第１モーラの後に短い単独の母音を抱えており、同様に見るのが適当と考えられる。●○○○○６語・●○○○○○１語は、いずれも条件異調値を取る例と見なされる。

ｂ類の３モーラ以上の語についても、よくよく検討すると、第３モーラが独立性の乏しい単独の子音・母音でたまたまｂ類調値を取っていると見られるものが少なくない。○●○の全53語中40語は明らかにその例。残り13語のうち「言葉」「白髪」「流れ」「顎」「墓」「眉」「烏」「弟妹」「腫物」「おまえたち」の10語は、いずれも第２モーラの後に短いが単独の母音を抱えており、やはり条件異調値を取っているものと見なされる。残る非条件異調値の語は「いとこ」「櫛」「子供」であるが、後２者については第３モーラの母音が狭母音であることがやや気になる。○●○○の全９語中４語は条件異調値を取る例。残る５語のうち「脛（スネ）」「額（ヒタイ）」は第２音節の後に短いが単独の母音を抱えている。非条件異調値の語は、「斧」「春₂」「親指」である。○●○○○の３語はいずれも条件異調値を取る例と見なされる。

２－３　屋鈍方言の用言の音調

イ）動詞

屋鈍方言の動詞の語形変化は、次のようにまとめられる。

◦１類相当語

行く：行ける（状況可能）ʔikjarur、行かれる（受身）ʔikja▾rur、行かせるʔikja▾ʃur、行かないʔikjam、行きたいʔikbuʃa、行くらしいʔikjurdïkʃatto:・ʔikjuNganïʃʃuN、行きそうだʔikju▾ro、行くそうだʔikjurtʃuddo:、行くよʔikjuddo:、行くがʔikjumbaN、行こうともʔikjuttʃimo、行ける（能力可能）ʔikiᵏkir、行く。ʔikjum、行くからʔikjuNkanai、行くまでʔiggadï、行く～ʔikjuN、行くだけʔikjuNdake、行くのにʔikjuNmuNna、行きながらʔikiʃʃara▾、行くだろうʔikju▾roja:、行くかʔikjuNnja:、行ったʔiʒaN、行ってʔiʒi、行ってはʔikïbaja、行けʔikï

他に、「着る」kirjum・「浴びる」ʔamïrum・「入れる」ʔirïrum・「為る」ʃum・「死ぬ」ʃinju▾r・「居（オ）る」wur等。調値は名詞ｂ類のそれならびに条件異調値にほぼ同じ。

◦２類相当語

書く：書ける（状況可能）kaka▾rur、書かれる（受身）kaka▾rum、書かせるkaka▾ʃum、書かないkakam、書きたいkagbuʃa、書くらしいkakjurdïkʃatto:・kakjuNganïʃʃu:r、書きそうだkakjuddo:、書くそうだkakjuNtʃiʒa:、書くよ

kakjuddo:、書くがkakjumbaN、書こうともkakottʃimo、書ける（能力可能）kakiᵏkir、書く。kakjum、書くからkakjuNkanai、書くまでkaggadï、書く～kakjuN、書くだけkakjuNdake・kakjuNʃiko、書くのにkakjuNmuNna、書きながらkakiʃʃana、書くだろうkakjuroja:、書くかkakjuNnja▼、書いたkatʃaN、書いてkatʃi、書いてはkatʃija、書けkakï:

他に、「見る」mirjum・「起きる」ʔwï:rum・「蹴る」kïrum・「受ける」ʔukïrum・「来る」kju▼r・「有る」ʔam等。調値は名詞b類のそれならびに条件異調値にほぼ同じ。

これを見て直ちに気付かれるのは、1類相当語と2類相当語との間に調値の違いが認められないこと、即ち韻律論的に1型化していると見られることである。調値的には両者とも名詞b類のそれならびに条件異調値を取っていると見なされる。そのことは、前章で奄美大島北部方言の代表として示した根瀬部方言の場合と同様であり、興味が引かれる。

なお、動詞終止形に-m形のものと-r形のものとが現われているが、それは語によってそのいずれかを取るというものではなく、全ての語に両形が存するものと見て良いようである（-m形は体言接続形-Nに形式名詞muNが接続して転訛したもの。-r形は終止専用形-riの母音が弱化・脱落したもの。詳しくは平山輝男ら1966の記述参照）。筆者が示した語形は、調査の際に話者がたまたまそのいずれかを答えたものを写し取ったに過ぎない。両形が存することは、あらかじめ確認済みである。

ロ）形容詞

屋鈍方言の形容詞の語形変化は、次のようにまとめられる。

◦1類相当語

赤い：赤くないʔakaneN・ʔa:sakjaneN、赤い。ʔa:sa▼、赤いかʔa:sarka▼i、赤いぞʔa:saddo:、ʔa:samba:、赤かろうʔa:saroja:、赤いらしいʔa:saNnïʃʃu:r・ʔa:saNdïkʃatto:、赤いそうだʔa:saNtʃumba:、赤いからʔa:saNkanai、赤いならʔa:sarïbaja、赤いよりʔa:saʔigma, 赤いがʔa:sambaN、赤かったʔa:satajja:、赤くてʔa:satï、赤いですʔa:sarjaoddo:、赤い～ʔa:saN、赤いだけʔa:saNFudu・ʔa:saNʃiku

他に、「重い」ʔussa・「遠い」tu:sa等。調値は名詞a類のそれにほぼ同じ。

◦2類相当語

高い：高くないtakaneN、高い。ta:sa(r)、高いかta:sarkai、高いぞta:saddo:、高かろうta:saro:ja:、高いらしいta:saNganïʃʃu:r・ta:saddïkʃatto:、高いそうだta:sartʃumba:、高いからta:saNkanai、高いならta:sarïba、高いよりta:saNʔigmaja、高いがta:sambaN、高かったta:sata、高くてta:satï、高いですta:sarjaoddo、高い～ta:saN、高いだけta:saNʃiku

他に、「良い」jittʃa:・「長い」naga:sa・「近い」tʃikja▼sa等。調値は名詞b類のそれならびに条件異調値に同じ。

形容詞では、1類相当語と2類相当語との間で調値・調類の区別が保たれているようである。ただし、否定形のみは区別が無い。

全般に、屋鈍方言は宇検村方言の中に在りながら瀬戸内町方言的様相（しかもその古い様相）が色濃い。奄美大島南部方言の諸特徴を考える上で恰好の方言と云って良いであろう。

3．まとめ

3－1　以上、奄美大島北部方言の代表として根瀬部方言を、また同南部方言の代表として屋鈍方言を見て来たが、両者はいずれもモーラを韻律単位とする２型の語声調方言であることが明らかである。前者は、いわゆる２モーラ名詞相当語について見ると１・２・３類／４・５類の調類区別を持つが、１モーラ語は１型化しており、また動詞・形容詞についても１型化が認められるものであった。後者は、同２モーラ名詞相当語についてほぼ1・2類／３・４・５類の調類区別を持ち、動詞は１型化、形容詞は２型であるが否定形のみは１型化しているものであった。

なお、後者の２型など、頭高調値の取り扱い如何によっては３型と見なすことも全く不可能ではない。筆者はこれを「条件異調値」として処理し２型と認定したのであったが、いわゆる〈tonogenesis〉的観点からはどのように見なされることになるのであろうか。関心の有るところである。

参考文献

上野善道　1996ａ　「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告－名詞の部－」『琉球の方言』20

――――　1996ｂ　「奄美大島笠利町諸方言の名詞のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』24

――――　1996ｃ　「名瀬市芦花部・有良方言の名詞のアクセント体系」『東京大学言語学論集』15

――――　1996ｄ　「名瀬市芦花部方言の用言のアクセント」『平山輝男博士米寿記念論集　日本語研究諸領域の視点』

――――　1997　「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告－用言の部－」『琉球の方言』21

――――　2000　「奄美方言アクセントの諸相」『音声研究』４の１

平山輝男・大島一郎・中本正智　1966　『琉球方言の総合的研究』